

翻訳と文化の変容

2025年11月29日（六本木校地にて）

金原 瑞人氏（法政大学名誉教授・翻訳家）

越前 敏弥氏（翻訳家）

三辺 律子氏（翻訳家）

司会：金子真奈美（本学 国際社会学部専任講師）

金原氏 おはようございます。金原です。このぐらいの人数だといろいろ資料が回せるので、まず最初にお返しするのが、『和英語林集成』という日本で初めての本格的な和英辞書です。ここに「美国」と書いてありますが、「びこく」というのは中国語でアメリカのことです。平文先生、ジェームズ・カーティス・ヘボン、ヘボン先生の作った辞書です。出版されたのが幕末ギリギリ。1867年の本です。これ、復刻版ですから大丈夫です。（笑い）何が大丈夫かということ、少々荒っぽく扱ってくださっても大丈夫です。まずこういうふうには、日本語のことばがカタカナと漢字で「アイ、愛」と書いてあって、その後に英語が添えてある。そういう日本で初めての和英辞典です。我々がよく使う「ヘボン式ローマ字」というのは、この表記に主に則っていることからもきています。よかったら回してみてください。いろいろなことばがあって面白いです。「アバタ」とかいきなり出てくるんですけど。

もうひとつ面白いのが、これですね。『横文字独学』という英語の入門書なんですけど、これは面白いことにこっち〔右〕からこっち〔左〕に開くんですよ。日本語の本は縦書きだから、こっち〔左〕から開くんですけども、この本はこっち〔右〕から開くようになっています。

そして、日本語はもちろん縦書きなんですけど、左から右へ読むようになっていきます。なぜかという、途中で英語が出てきて、その英語に合わせて下の方に日本語を添える時には、こっち〔左〕から書いてあった方が読みやすいからです。これを「左縦書き」と言うんですけど、左縦書きって珍しい。

もう一冊は『英学階梯』。階梯というのは「はしご」のことで、入門書です。こちらは、普通の和書と同じで、右縦書きになっています。後ろの方を見ていただくと、“What is your business?” と英語があって、その訳文がここに小さい縦書きで書いてあるんです。これら 2 冊を比べてひとつわかるのは、どこにも日本語の横書きがないということです。全くありません。『和英語林集成』の方には横書きがあるんですよ。英語と同じように、左から書く日本語の横書きがあるんですね。この違いをよく見て確かめてほしいので、今日はこれらを持ってきました。もうひとつ。幕末から明治にかけては、英語と日本語の表記が混在する場合は、表記の仕方が非常に混沌としていて、いろいろな試みがなされています。それをご自分の目で確かめてください。

それでいきなり話はローマ字なんですけど、よく学生と話して思うのは、「ローマ字」って何？「ローマ」って何？ 気になりますよね。学生は大体知りません。ローマ字というのはラテン文字のことで、ラテン文字とは何かというと、ABC のことです。じゃあ、ローマ字以外にどんな文字があるのかというと、ギリシャ文字—— $\alpha \beta \gamma$ です。あと、ロシア語のキリル文字があります。その中でローマ字——あるいは、ラテン文字——は、ヨーロッパの多くの国々が使っている表記です。そして、日本語の発音をそういうアルファベットで示したのもローマ字なんです。つまり、日本語のローマ字表記ですね。我々がよく知っているのは、ヘボン先生の「ヘボン式ローマ字」表記ですが、最初の日本語のローマ字表記は、おそらくポルトガル語なんです。

「以後よろしく」、1549年。懐かしいですね、日本史をやっていた方。フランシスコ・ザビエルが日本にやって来て、その後、ポルトガルの宣教師が次々にやってくる。彼らの使命は、日本人に聖書の教えを伝えることです。そうすると、まず日本語を学ばなくてはならない。そのために、辞書を作るわけです。日本語の発音をローマ字で表記して、それにポルトガル語を添えて辞書を作ったんです。おそらく初めての翻訳ですよ。辞書というのはひとつの翻訳書ですから。そんなふうにして、ポルトガル語の辞書ができて、それからスペイン語のものができて、やがてフランス語、英語の簡単な辞書ができるわけです。そして、ヘボン先生が日本語と英語をつなぐ本格的な辞書を作ったということなんです。

ついでに言っておくと、去年文科省がローマ字を見直せと言って、お触れを出したのをご存知の方はいらっしゃいますか？ はい、そうですね。昨年、多分5月だったと思います。今年、それが決まったのをご存知の方。いきなり少なくなりますよね。(笑い) あまり関心がないということだと思うんですけど、これはあるジャンルではとても大変なことなんです。いま小学校で教えているのは訓令式というローマ字です。ハヒフヘホは、HにA, I, U, E, Oを足す、と教えるじゃないですか。あれって、我々が普段目にするヘボン式と違いますよね。どっちが正式かご存知ですか、と言われても分かりませんよね。両方使われていますから。ただ、いま小学校で教えるその訓令式のローマ字法というのは、だんだん使われなくなってきて、ヘボン式が普通になってきました。パスポートもヘボン式になっています。この齟齬を何とかせいというわけで、今年の8月に文化審議会が結論を出して、ヘボン式を基本として使うことになりました。これは大変なことで、なぜかという、今まで官公庁が使っていたローマ字表記の書類を全部変えなくてはならなくなるし、小学校で教えるローマ字も教え方も

全部変えなくてはいけなくなるからです。けれど、よく目にするヘボン式になっていいんじゃない、と思うかもしれませんが、案外そこに落とし穴があります。

なんでわざわざ日本の小学校で訓令式を教えたかという、あれは日本人のためのローマ字なんです。それまでは、外国人が日本語を覚えるためのローマ字表記というのがあったわけです。ところが明治に入って、尋常小学校読本が出て、国語の教育が始まると、国語教育の一環としてローマ字を教えるという流れが出てきます。何でそんなのを教えるかという、さっき言ったように、カキクケコというのは、KにA、I、U、E、Oをつければ、子音+母音、というのが分かるわけじゃないですか。それまで「いろは」で教え、「いろは」で覚えてきたものを五十音順にして、それをローマ字表記にすると、日本語の子音と母音の関係がはっきりする、ということもあって、国語教育のひとつとして、日本人のためのローマ字というのが作られました。日本人のためのものなので、それがアメリカ人、フランス人にとってどうかというのは、それは別問題。だから明治以降、外国人が日本語を覚えるためのローマ字表記と、日本人が日本語を教えるためのローマ字表記の二種類、二本立てできたわけです。

一方、ヘボン先生の『和英語林集成』の影響力もあって、ヘボン式が少しずつ使われるようになるんですけども、これを決定的にしたのは、第二次世界大戦後、GHQが入ってきたこと——ほとんどの表記が英語スペリングになっていくんです。それで、ヘボン式ローマ字の表記が日本中に広まって、訓令式とヘボン式の2種類の表記が使われるようになっていきます。

さっきのヘボン先生の『和英語林集成』に戻るんですけど、辞書を見てお分かりの通り、まずヘボン式ローマ字で日本の言葉が書かれていて、それから横書きで日本語のカタカナや漢字が続き、そのあとに

英語で意味が説明されている。左から右への横書き——これを「左横書き」といいます。英語やフランス語と同じ、ヨーロッパ言語と同じ表記で日本語が横書きになっています。これは画期的な試みです。他の2冊は日本語の縦書きを45度回転させたり、端の方に小さい縦書きの文字で意味を添えたりしてあります。非常に読みづらいじゃないですか。それと比べると、『和英語林集成』はとても読みやすい。その意味で、左横書きは画期的な発明だったんですけど、なかなか定着せず、幕末から明治、大正にかけてもいろいろな表記が混在します。

先ほどお話しした2冊の英語の入門書は、両方とも明治4年のものです。だから、その頃からもう、ヨーロッパ言語をどう取り入れるかということで、日本語の表記は錯綜したんですね。やがて、いまの我々の知っている横書きに落ち着くんですけども。何でそんなに混沌としていたかという、日本語に横書きがなかったからです。あったでしょう、という方もいらっしゃるかと思います。英語やフランス語のように左から右に書く左横書きは日本語になかったとしても、右横書きがあった、と。旅館なんかに横額が掛かっていて、「日日は好日」とか「上善如水」とか書いてあるじゃないですか。しかし、あれは横書きに見えますが、横書きではないというのが国語学者の定説で、何かというと、一行一文字の縦書きだと言います。はい。納得する方、どのくらいいらっしゃるでしょうか。あんまりいらっしゃいませんよね。でも、ちゃんと理由があって、この右横書きに見える表記方法は、中国にもあります。そして、中国語でも日本語でも縦二文字の縦書きの書はあるんですよ。その究極の形がこれです。もうひとつの理由は、右から左に書くという発想があったら、2行、3行のものがないとおかしい。一行のものしかないんです。だから、これは一行一文字の縦書きと考えた方が合理的だというのが国語学者の定説です。本家中国でも、日本でも、かつての朝鮮でも、横書きという発想はなかった。

縦書きしかなかった。そこにポルトガル語、スペイン語、英語なんかが入ってきて、どう折り合いをつけるかというので、いろいろな試みが行われた結果、ヘボン先生の『和英語林集成』のような左横書きが一般的になって、現在に至るというわけです。

ついでに言うと、いま小中高大の教科書はほとんど横書きです。縦書きのものは逆に少ない。そういう時代になってきています。縦書きを使っているところはどこがあるかと世界を見渡しても、本家本元の中国でさえ、文化大革命の時に繁体字を簡体字に変えた時に、横書きが基本になっています。だから、森鷗外の『舞姫』を中国語訳で読むと、横書きなんです。もうひとつ。例えば、「月落ち烏啼いて霜天に満つ」。漢詩があるじゃないですか。彼らはあれを横書きで習うんです。「いいの？」という気がしません？ そもそも漢字が違う、それも横書き。

朝鮮半島——いまふたつに分かれていますけども、朝鮮半島はどうかというと、戦後北も南もハングルが表記として一般的になります。ハングルは、日本語と同じように縦書きも可能ですが、基本、横。だから小説はほとんど横書きです。

そもそも本家本元の中国が横書きで、隣の朝鮮半島も横書き。いま、縦書きが残っているのは恐らく日本と台湾と言われているぐらい、案外この縦書き表記というのはなくなってきています。日本でもどんどん減ってきていますよね。我々がパソコンで入力するときも、だいたい横書きです。

持ち時間は20分ですよ。まだ時間があるので、ひとつ質問です。小説を読む場合——誰のどんな小説でもいいんですけど——やっぱり縦書きで読みたい方は手を挙げてください。横書きでもいいという方は？ これを20年前から大学や図書館なんかでよく聞いているんですが、横書きでもいいという人がだんだん増えてきています。でも、大学生に聞くと、やっぱり小説は縦書きで読みたいという学生がかなり

多いです。続いて、電子書籍と紙の書籍、どっちが好きかと聞くと、大学生でもやっぱり紙を選ぶ人が多いんですよ。ところがその次に「電子書籍の定価が半額だったらどっち？」と聞くと、ほとんど全員電子書籍です。(笑い) はい。皆さんどうです？ 電子書籍は字も大きくなるし、僕なんかにはとても便利なんですけど、定価が半額なら電子書籍でもいいという人はどのくらいいらっしゃいます？ かなり裏切り者が増えますね。(笑い) もうそういう時代になってきているんだと思います。

もう少し時間があるので、ついでにヘボン先生のお話をしておくと、ヘボン先生は幕末の頃にアメリカから宣教師としてやってきました。眼科の先生でもあって、とても有名だった。当時、岸田吟香という岡山県出身の男が江戸に来ていて、目を患っていたんですが、ヘボン先生に治してもらい、そのあとヘボン先生に師事します。一方、ヘボン先生は『和英語林集成』の原稿を仕上げ、それを出版しようと思うのですが、日本にはアルファベットの活字がない。こんなごつい辞書を印刷するとすると、活版印刷が一番で、木版だと大変、というので、どうしたかという、上海に渡るんです。奥さんと岸田吟香を連れて上海に渡って、大きな印刷所に行きます。そこはミッション系の印刷所なので、英語と漢字の活字があるんです。そうすると、カタカナさえ作ればあの本ができるわけです。そこで、岸田吟香がカタカナの活字を作らせるんですね。ちなみに『和英語林集成』というのは、岸田吟香がつけたタイトルだと言われています。初版は1,200部印刷したそうです。それを横浜に運んで売った。だから、『和英語林集成』には「横浜」という地名が入っています。そうやって『和英語林集成』が上梓されて、日本の横書きの表記を少しずつ少しずつ変えていくわけです。

岸田吟香というのは面白い人で、岡山出身で横浜に行って、その後

ジャーナリストになって、新聞記者になって、台湾に行ってその時の従軍記を書いて帰ってきて、目薬を売り出して、その後、日本初の盲学校ができるときには協力しました。子どもが14人いたんですけど、一番末の息子が岸田劉生です。この話をする、頭のどこかで今日の話が少しでも覚えてもらえそうな気がするのですが……。

何が話したかったかという、全く横書きのないところに海外の横書きが入ってきて、格闘するうちに、横書きという全く新しい表記方を取り入れるようになり、それが日本語の——中国語もそうですけど——表記の可能性を2倍、いや多分3倍、4倍に増やしたということ。

つまり、異文化がぶつかってきた時どうなるかという、2種類あって、ひとつは強い文化が相手の文化を押し潰す。もうひとつは、そのふたつを何とか融合しようと頑張ったあげく、新しい可能性が生まれる。日本語、中国語における横書きの発明、発展というのは、まさにその典型的な例かと思ってご紹介しました。以上です。

(拍手)

司会 金原先生、大変興味深いお話をありがとうございました。縦書きの文化に横書きの記号が入ってくことで、文字通り日本語が右往左往してしまうという。右から左へは理論上は縦書きだということでしたけれども、左から右への合理的な横書きがなかなか定着しなかったということから、ひとつの言語が国境を超える際のインパクトの大きさを痛感させられました。大変ダイナミックな視点をお示しいただきありがとうございました。それでは、次に三辺先生、お願いいたします。

三辺氏 よろしく申し上げます。三辺と申します。私は、ヤングアダルトという10代向けの海外文学を中心に訳しています。いまそこで

ということが起こっているか、という話をしたいと思います。

2021年に、英語圏児童文学会でこれからのYA文学でどんなものが注目か、という話をした時に、LGBTQ、feminismとBlacks Lives Matterという3つのキーワードを挙げました。この3つは、いま英語のまま普及していることばだと思います。どれもアメリカ生まれのことばなんですけれども、日本語では表しきれずに、いろんな紆余曲折がありつつ、結局英語のままカタカナ表記で使われるようになったことばです。こうした用語の普及と、このようなテーマを持ったYA文学が日本で翻訳されるタイミングの関係を見ていきたいと思います。

まず、LGBTQからですが、このことばは2000年前後から日本で少しずつ見られるようになって、新聞とか行政文書に登場するようになるのが2006年ぐらいからです。2015年に、皆さんも記憶していると思いますが、渋谷区が同性パートナーシップ証明制度を導入しました。それぐらいから、新聞・テレビや行政文書でLGBTQということばが一般化していきます。

これは、電通ダイバーシティ・ラボの調査ですが、LGBTということばの普及率は、2015年に行政文書などで使われるようになった時点でまだ37.6%です。ただし、これは全国の20から59歳を対象としているので、限りのある統計にはなりません。2018年で68%、2020年で70%になります。でも、これはLGBTということばを知っている、とか、聞いたことがある、ということであって、意味を正しく理解しているか、とか、中身まで知っているか、という質問ではないんですよ。

では、こうしたテーマを持つ英語圏の文学の翻訳状況を見てみますと、『ウィル・グレイソン、ウィル・グレイソン』と『サイモン vs 人類平等化計画』というアメリカでも大きな反響のあった2作が翻訳さ

れたのが2017年です。先ほど言ったように、LGBTということばは2015年ぐらいから一般に普及し始め、その2年後の2017年にこの2冊は翻訳されたことになります。

『ウィル・グレイソン、ウィル・グレイソン』は、すでに2010年にアメリカで出版されていました。これは、ウィル・グレイソンという同姓同名の男の子ふたりの話で、一人がゲイの男の子です。こちらは(L)G(BT)をテーマにしたもので『ニューヨーク・タイムズ』のベストセラーリストに載った初めての作品という意味でエポックメイキングな作品です。アメリカでの出版は2010年、日本で訳されたのが2017年。

『サイモン vs 人類平等化計画』は、サイモンという16歳の男の子が主人公。温かい家庭に生まれ、友達もいて、ごく幸せに暮らしていますが、彼はゲイで、それを友達に言っていない。だから、まだカミングアウトしていないということになります。そのことを唯一打ち明けたネット上の友達とやり取りしているのですが、それを別の友達に見られてしまいます。マーティンというその男子は、サイモンの秘密を内緒にするかわりに女の子を紹介してよと、悪気なく頼むんです。つまり、これはアウティングとカミングアウトの問題を描いた作品です。こちらは2015年にアメリカで出版されましたが、ゲイの主人公がいじめ等にあうわけでもなく、皆にうけ入れられる設定の作品として大ヒットしました。当時、大人気だった俳優ニック・ロビンソンが主演の映画も大ヒットします。

「カミングアウト」は、1970年代後半ぐらいから使われていて、当初日本では「同性愛の自己告白」というふうに訳されていました。そもそも、「カミングアウト」とは何かというと、“coming out of the closet”で、クローゼットから出る、秘密を公にする、というような意味ですよね。80年代ぐらいに日本では、「打ち明ける」などと訳さ

れます。で、90年代ぐらいは「告白」「公表」「自己開示」と訳されますが、定着しません。また当時、カミングアウトというのは性的指向を隠さない意思を表明する行為で、勇気のある行為、称賛されるべき行為だというふうに捉えられていました。その意味が転換するのが2000年代以降で、いま私が紹介した『サイモン vs 人類平等化計画』にもあるように、「なんで性的指向をわざわざ『カミングアウト』しなきゃいけないんだ、そんなの別に自由だろう」というような考え方が出てきます。その意味で、この作品はエポックメイキングだったわけです。日本では結局「打ち明ける」とか「自己告白」とか「表明」という訳語は全部なくなって、「カミングアウト」のまま定着することになります。今では、それが学術文書とか行政文書でも使われています。

あと、「アウトティング」というのは、他人のセクシュアリティを勝手に人に言うという、本人の同意なしの暴露、の意味です。2015年に、一橋大学の学生がセクシュアリティを勝手に公表され、それを苦にして自殺してしまったという事件が起こり、日本でもアウトティングの問題が意識されるようになります。でも、さっきの LGBT ということばと同じで、そうやってことばが公になってから 80% ぐらいの人が知るまでにはかなりタイムラグがあり、その過程で、そうしたテーマを持った YA 文学が日本で多く訳されていると思います。

セクシュアリティの問題としては、トランスジェンダーの問題があります。先にことばの説明をすると、2000年代ぐらいまでは「性同一性障害」というふうに訳されていました。日本に「性同一性障害者の性別の取扱いの特例法」という法律がありますが、この障害ということばが、疾患であるという捉え方につながるので、国連・WHO が「それは疾患ではなく多様性の概念である」というふうに再定義したのが 2019 年。その再定義がされるまで、“transgender” は

“transsexual”とも混ざってしまって、「性転換」とか、「性別変更者」と訳されていましたが、結局、最終的には「トランスジェンダー」で定着しました。それが2010年以降のことですが、スライドにある『ジョージと秘密のメリッサ』が2016年、『パンツプロジェクト』が2017年、『ぼくがスカートをはく日』が2018年、『兄の名はジェシカ』が2020年に出版されているので、「トランスジェンダー」ということばが一般の人たちにこれから広がる、という比較的早いタイミングで、作品が出版されているのがわかります。

その『ジョージと秘密のメリッサ』の主人公は、4年生のジョージです。ジョージは、生物学的な性は男の子ですが、内面（性自認）は女の子。でも、家族に言えない。そのことに薄々気がついているお母さんは、それにすごく反発しています。学校で劇が行われることになりましたが、ジョージは女の子の役をやりたがります。そうすると、友達がひとり協力してくれるんですね。その友達は女の子なんですけれども、「公演の時に役を入れ替わってあげるよ」と言います。結局、それを学芸会の発表で見たお母さんが、自分の息子——当時は息子なんですけども——の本当の気持ちを理解して行って、ありのままを受け止めていこうと思う、というようなストーリーになっています。

『兄の名はジェシカ』の主人公は14歳のサム。サムの兄のジェイソンはサッカー部のエースで、サムはそんなカッコいいお兄さんに憧れています。ところが、ある時からそのお兄さんが「自分は女性だと思う」と言い始め、サムは葛藤します。トランスジェンダー当事者でなく、その弟や、家族の物語です。

次の「フェミニズム」ですが、フェミニズムということばはさすがに比較的早くから使われていました。「婦人解放」とか「婦人運動」とか、いろいろな訳語がありつつも、結局は「フェミニズム」ということばで落ち着いて、1970年代以降ぐらいから使われています。

その中でも、例えば「ジェンダー」ということばは、初めはやはりアメリカで使われました。「セックス」が生物的な性だとすると、「ジェンダー」は社会的な性という意味になります。日本でジェンダーは「性差」、「男女差」とか「性別役割」ということばで訳されていましたが、どれも少し違う。結局「ジェンダー」ということばで定着することになります。

これも電通総研の調査ですが、「ジェンダーに関する意識調査」という調査を2022年に全国の18歳から79歳の男女を対象に行ったときに、「ジェンダー」ということばを「内容まで知っている」、「ことばだけは聞いたことがある」という人はまだ67%。でも、こういうことばは広がれば早いので、2022年に67%だったら、いまはもちろん増えていると思います。SNSとかビジネスシーンで「ジェンダーギャップ」とか「ジェンダーバイアス」ということばが頻繁に使われるようになったので、これでことばが広がってきたのだと思います。

その時にどんなものが訳されたかという、例えばこの『嘘の木』という作品は、19世紀のイギリスが舞台で、博物学者になりたい女の子が主人公になります。しかし当時は女性が仕事に就くということは考えられなかったので、そこで生まれるいろいろな確執や葛藤を、ファンタジー要素を交えて書いた本です。これは2017年、日本では比較的早く出ていると思います。ただ、『嘘の木』は、もともとヤングアダルトとして出版されたのですが、日本では大人の本として出されました。だから、10代を対象にした本としては出版されなかったんですね。

では、ヤングアダルト文学としてジェンダーというテーマを真正面から描く作品が多く翻訳されるようになるのはいつぐらいかという、例えば『詩人になりたいわたしX』。これが2021年になります。これは、ニューヨークで暮らしている15歳のシオマラというドミニ

カ共和国の移民の女の子の話です。敬虔なカトリック信者であるドミニカ移民のコミュニティで、「女の子だからいけない」と、ことあるごとに言われ、シオマラは抑圧を感じています。

また、この（スライドの）2作品は、ルッキズムや性的同意といった近年のフェミニズムのテーマに切りこんでいる作品ですが、訳されたのは『かわいい子ランキング』は2024年で、『ガールズ・ルール』も2024年です。自分の訳書で恐縮ですが、『かわいい子ランキング』はその名の通り、学校でかわいい子ランキングを作られてしまった女の子たちが、連帯してそれに反抗する話です。

『ガールズ・ルール』は、教師によるセクシュアルハラスメントと性的同意について描いています。近年のフェミニズムのテーマを扱った作品の翻訳は先程のLGBTQをテーマにした作品に比べ、ちょっとタイムラグがあって、実際アメリカで本が出てから5、6年経ってからのでないかと訳されていないものが多いですね。ようやく最近増えてきた印象です。

もちろん、日本の作家も踏み込んだ作品をたくさん書いていらっしゃると思います。では、海外のYA小説にはもうやることがないのか、と言われると、そうでもないと思うんです。例えば、さっきも言ったように、用語がどれだけ広がっていくかということをひとつの目安にすると、例えばこういうことばがあると思います。“reproductive health rights”。性と生殖に対する権利ですよね。いつ、どんな時に子どもを何人持つか、あるいは持たないかというのは本人の意思が大事だ、という考え方です。こうした本は、アメリカでいまヤングアダルトとしてかなり出ていますが、日本は性教育も遅れていますし、あまり訳されている感じがしません。

あとは、“sisterhood”とか“empowerment,” “mansplaining”。“body positive”は、例えば「身体肯定感」「体型多様性の尊重」とい

ま訳されていますけど、その訳語が定着するのかな？と思ったりしています。ちなみに、「シスターフード」は英語そのままです。定着しているかなと思います。“empowerment”も、「女性の力を引き出す」とか、「自己決定力の育成」と訳されていますね。で、“mansplaining”は「上から目線の説明」とかいろいろあるけれども、最近では「マンスプ」と言われるようになってきたので、もしかしたらそれで定着するのかもしれないと思います。さっきの「ボディ・ポジティブ」ですが、これは身体肯定感という、例えば女性は痩せていて、よくコマーシャルとかにあるように、脱毛をきれいにしていなくちゃいけない、とか、そういう規範に対して自分の体を肯定できないことに対する反発ですよ。

体型のことでは、例えば、それこそ金原さんが訳された『ファイティング・チャンス』という、ついこの間出た本もあります。『ファイティング・チャンス』は、太っている女の子が主人公になっています。その自分の体をどれだけ肯定できるか、という話なので、まさにボディ・ポジティブな話だと思います。

(スライドの)最後の“toxic masculinity”は、よく「有害な男らしさ」と訳されていますけど、訳語として誤解を招きやすいのではと思っています。このトキシック・マスキュリティとは、男性のほうが社会的に押し付けられる「男はこうあるべき」というステレオタイプの規範の負の面——男性に対するプレッシャーですね——に対してのことばなので、「有害な男らしさ」だと反対の意味にとられかねないと思うからです。かといって、「トキシック・マスキュリティ」が定着するかというと、それもわからないんですけども。ともかく、こういう概念がことばとしていま一応入ってきていると思うので、こうしたことばが示す概念をかみくだき、文学にした作品がどんどん訳されれば、日本で概念自体が定着する一助になると思います。ヤングアダ

ルトの分野では、いろいろな海外文学を翻訳することによってできることがまだあるんじゃないかと思っています。

最後のブラック・ライヴズ・マターですが、これは2020年の事件があったので、皆さんも目にする人が多いことばかなと思います。これが日本で固有名詞化されるのは、2020年のあのジョージ・フロイドさんの事件があった時だと思います。警官に膝で首を押さえつけられて結局亡くなってしまった人の事件です。アメリカでは、もちろんその前の2013年からブラック・ライヴズ・マター運動が起こっていますが、このテーマは、さっきのフェミニズムに比べるとわりと早くから日本でも訳されています。

『ザ・ヘイト・ユー・ギヴ』は黒人の女の子が主人公です。黒人の友達と一緒に車に乗っていたら警官に止められるのですが、その時に一緒に乗っている男の子が警官にちょっと反抗的な態度を示します。あと、屈むんですよ。警官が「銃を出すかもしれない」という先入観を持つ。それで、その男の子は警官に撃たれて死んでしまう、というところから始まる話です。まさにそれは現実に起きていることです。これが書かれたのが2017年で、2018年にはすぐ訳されています。だから、2020年のジョージ・フロイドさんの事件よりも前に訳されているんです。また『MARCH』は公民権運動をテーマにしたグラフィックノベルのシリーズで、これも2018年には全部訳されています。

『オール・アメリカン・ボーイズ』は、白人特権に関する話でもあります。誤解から白人警官に入院するほど殴られてしまった黒人の男の子と、その男の子と同じ学校に通う白人の男の子が交互に語る形で書かれているもので、これは2020年、まさにジョージ・フロイドさんの時に訳されました。このテーマは、日本では移民に対する差別とか、そういった文脈で今後いろいろな作品が訳されていくのかもしれない

れません。

移民のテーマを描いた『僕たちは星屑でできている』は、イギリスとエリトリアの移民の男の子の話。『あいだのわたし』は、ドイツを思わせる国を舞台に、やっぱり難民認定を待つ女の子の話。『アンナは、いつか蝶のように羽ばたく』は、オーストラリアに住む中国系の女の子の話。『ゾウがやってきた』は、トランプ時代を背景に入管問題にお母さんが引っかけってしまうトルコ系の女の子の話になります。これから、こうした作品はもっと日本に紹介する必要があるのではないのでしょうか。

移民関係でポイントとなることばは“microaggression”や“xenophobia”といったものでしょう。“xenophobia”は、現時点では「外国人嫌悪」というふうに訳されていますが、これからどういうことばで定着していくのかは分かりません。“microaggression”も最近少しは見ると思います。「マイクロアグレッション」ということばを聞いたことがある人はいらっしゃいますか？ そうですね。多分、これがあと数年でもうちょっと広がっていくのかな、と考えているところです。

何を言いたいかということ、アメリカで生まれたことばが日本で学術用語からだんだん一般化する過程でヤングアダルトが翻訳されていることが多く、訳者とか出版社が社会の要請に応える形で翻訳して、そのことばの概念を具体的に落とし込むような作品が紹介される。そういう意味では、まだ海外のヤングアダルトを翻訳することで、できることがたくさんあるのではないかということです。ことばとの関係で見えていくと、さまざまなことばが見えてくると思うのです。

またちょっと面白い例として「ノンセク」ということばがあります。このことばは、恋愛をするけれども肉体関係は不要、という人を指しています。「ノンセク」は、一瞬英語から来たような感じがしますけ

れども、完全に日本のことばです。多分英語では“asexual”の中のひとつになるのかな。「アセクシュアル」というのは性的欲求がない、だから恋人もいない、という時によく使われます。ですから、「ノンセク」と少しずれますね。「ノンセク」のような日本のことばが生まれて、SNS 界限でかなり使われるようになってきていることから、そうやって日本で生まれる概念もあるんだなと思って、面白いと思います。日本発の概念が「輸出」されるかもしれません。

今日は、まだまだヤングアダルト翻訳にできることがあるんじゃないかなというお話でした。以上です。

(拍手)

司会 三辺先生、ありがとうございます。大変興味深く拝聴しました。日米の出版のタイミングにタイムラグがあるとか、訳語が定まって概念が定着するまで比較的時間を要するといったお話を伺いながら、訳本は社会を映し出すものでもあるのだと痛感いたしました。英語に“deafening silence”という表現があって——直訳すると「耳がつかなくほどの沈黙」という意味の表現ですが——これは沈黙が何か大きな意味を持つ・重大な意味を持つ文脈で使われます。「空白地帯」を読み込むことで、自文化や自国の社会について見えてくることのあるのではないかと、あと、翻訳家の先生方の選書眼によって日本に取り込まれる概念も多数あるのではないかと感じながら伺いました。ありがとうございます。それでは続いて越前先生、お願いいたします。

越前氏 お待たせしてすみませんでした。改めて、越前です。よろしく申し上げます。今日の僕のテーマがですね、おふたりの話を聞いてちょっと違う話をしたくて、「和臭」というテーマでお話ししようかと思いました。実は喉の調子がずっとあまり良なくて、声が割れ

ちゃったりすることがあるので、お聞き苦しいこともあるかもしれません。

最初にお尋ねしたいんですけども、翻訳における「和臭」ということばの意味がわかる人というか、イメージがつかめる人、「和臭」って何だっということがなんとなくわかる人、手を挙げていただけますか。あまり多くないですね。はい、わかりました。

和臭というのは、ひと言で言うと日本語臭さなんですよ。例えば和臭という時に、必ずといっていいほど、こういう例が挙げられるんですけど。これ、いかにも ChatGPT で作りましていう絵ですけど、本当に今朝作りました。(笑い) ある翻訳小説、SF です——宇宙船の中で何人もの人が一生懸命議論をし合っていて、なかなか結論が出ないという状況です。1950 年ぐらいのある翻訳小説なんですけど、作中ではこの状況のことを「小田原評定」というふうに呼んでいるんです。(笑い) いまちょっと笑いが出ましたが、これが和臭の典型ですね。つまり、まず西洋の小説の中で「小田原」が出てくるという不自然さ、それから「評定」ということばはぎりぎりいいかもしれませんが、最近だともうそもそも「小田原評定」の意味がわからない人が多いかと思います。こういうのが和臭の典型です。

もうひとつ例を挙げます。似たような例ですね。これは僕も新訳で訳した『九尾の猫』という作品の 1950 年版、村崎敏郎さんの、早川のポケミスで出た時の訳。これも結構、業界ではよく引き合いに出されるんですけど、読みますと、「月曜の夜、市長の役所で緊急会議が開かれた際、警視総監はハッキリ言明した。「こういう事を根絶する為、強硬な警察手段を用いよう。われわれは市のあらゆる熊さん八さん連中を自称警官にさせておくわけにはいかない」。ここですね、熊さん八さんが突然ニューヨークの話の中に出てくる。しかも、その後ジャックという人物も出てきて、ジャックと熊さん八さんが同じセ

リフの中に登場する。こういうのも、いわゆる和臭と言われるものの典型です。

でもいま、1950年代の古い例を挙げましたけど、最近でもこういう例はあるんです。これ、こういう建物ね。特にアメリカの小説なんかでよく出てきます。英語で何て言うか。Quonset hutと言うんですね。小文字で始まることもあります。これは辞書にどういう訳語が出ているか。「かまぼこ形兵舎」と出ているんですよ。実際、最近の翻訳小説を読んでも、時々この「かまぼこ形兵舎」にお目にかかるんですよ。で、それはいいのかどうかっていうことです。僕はちょっとやっぱり笑っちゃうかな。普通に、客観描写でこの「かまぼこ形」というのが出てきた時に、どうしてもやはり不自然さを感じる。じゃあ、どう言えばいいかという、そもそも形について説明しなくても良ければ、ただ「兵舎」と訳せばいいんです。あるいは、兵舎じゃない場合もあって、いまでもこういう形のものを一般的に、他の建物でも Quonset hut と言うんですけど、例えば「プレハブの建物」というふうな訳し方をしてもいい。それでも、どうしても形をなんとかこのまま説明したい時、訳語に入れたければ「半円筒形の兵舎」というふうな訳をすればいい。やっぱり「かまぼこ」というものがどうしても西洋の出来事を語っている文章の中では浮いてしまう。訳文の中で浮いてしまう。こういうことは、翻訳をやっていて常に突き当たる問題なんです。

もうひとつ例を挙げます。僕の訳書で、オー・ヘンリーの『賢者の贈り物』という短編集の中に「金のかかる恋人」という短編があります。ある登場人物の男の人の話をしていて、古い訳というか、昔から残っている訳のひとつで、“He was no more than Bill and Jack and Mickey.”というこの箇所が以前どう訳されているか。ある訳書には「ミイちゃんハアちゃんとちっとも変わらなかったのだ」という訳が

載っています。これ、面白いですよ。面白いけど、やっぱり、ちょっとこれは普通の流れではまずいだらうなと思う。ちなみに、僕はここをどう訳しているかというところ——ビルとかジャックとかミッキーというのは別にだれだっていいんです。適当にあげている名前ですから。だから「ビルやジャックやミッキー」だけでは、ちょっと日本人にはやはりわかりにくいんで——「といたどこにでもいる手合い」ということばを補っている。一般には、こういう形に処理するわけですね。

ちょっとここで体系的な話をする、翻訳論なんかを勉強している人は、多分このことばをご存知だと思うんですが、「異化」と「同化」という言い方があります。“foreignization”（フォリナイゼーション）と“domestication”（ドメスティケーション）。英語でちょっと違う単語で表す場合もあるんですけどね。で、「異化」と「同化」というのはどういう意味かというと、「ソース言語」と「ターゲット言語」という言い方をよくするんですけども、ソースは「元」。例えば、英語から日本語に翻訳する場合、英語がソース言語です。逆に翻訳した結果として訳文が提示される言語がターゲット言語で、この場合は日本語。翻訳というのはソース言語をターゲット言語に変えていくという、大雑把に言うとそういうプロセスなんですけど。フォリナイゼーションというのは、ソース言語——英日翻訳では英語——の論理や習慣に近づけた訳文を目指す。翻訳においては、ですよ。逆にドメスティケーションというのは、ターゲット言語の論理や習慣に近づけた訳文を目指す。要するに英語の小説なら、出てくるものをそのままの形で残していくのが異化で、逆に、同化は、日本の文化に近づけたり、日本語の論理に近づけた訳文を目指していくこと。大雑把に分けてこのような言い方をすることができます。

和臭という話はこれに絡んでくるんですけど、異化と同化の話をもう少し続けて、単位について考えます。度量衡です。皆さんが翻訳の

小説を読んでいて、例えば「ドル、セント」が、もし作中で「円」に変わっていたらちょっと気持ち悪いと思うはずです。アメリカ人が「千円払った」とか書いてあったら多分変な感じがするだろう。この場合は、英語圏の論理・文化に合わせるのが自然なのだから、異化の方に近い、フォリナイゼーションの方に近いのですね。それが常識的な感覚です。

でも、ドル、セント、ポンド、ユーロぐらいまではわかるかもしれないけど、あまり慣れていない通貨の場合はどうか。先週、僕はチェコに行っていたんですけども、チェコの通貨はチェコ・コルナというんですけどね、1チェコ・コルナがいくらぐらいかって、ほとんどの人が知りませんよね——7.5円ぐらいなんですけども——となると、どうすればいいかとかいう問題が出てくる。まあ、ちょっとこれは置いておきましょう。一方で、たとえば「摂氏」。温度は通常英米だと Fahrenheit という単位ですね。「華氏」という日本語に訳されることもあります。「°F」と書きます。ファーレンハイトね。

日本だと、ご存知の通り「°C」ですよ。英語だと centigrade か Celsius。これが翻訳小説で、もし「ドル」や「セント」と同じようにファーレンハイトのまま「華氏」の温度で書かれていたら——「熱が百度ある」とかでですね、「今日は外の気温が70度だ」とか言ったら——パニックになりますね、多くの人が。わけがわからない。だからこの場合は「摂氏」で訳するのが普通です。つまり、この場合は同化を目指すんですが、広い意味ではこれも和臭があるんですよ。ただし、摂氏は日本だけで使われる単位ではないから、あまり和臭という感じはしないと思います。

翻訳というのは常にその異化の部分と同化の部分の、どちらかが全部というわけではなくて、どこかでバランスを取っていきます。

その中間にあるのが例えばフィート、インチ、ポンド、オンスとか

いう長さとか重さの単位です。翻訳小説だと、今では多分長さや重さをメートルとかグラムとかに直す人が多いです。8割から9割ぐらい。翻訳小説だと、そのぐらいの比率でしょう。でも、20世紀の終わりぐらい——僕がこの仕事を始めたのはその頃なんですけど——まだその頃はセンチとかに変える人が少なかった。フィート、インチ、ポンド、オンスを残す例のほうが多かったんですね。これは一長一短と言いますか、当然フィート、インチ、ポンド、オンスではわかりにくいという問題があります。一方、逆にセンチとかグラムとかに変えてしまうと、なんでイギリス人なのにセンチで喋っているんだ？ というようなクレームがよくつく。ですから、どっちが正しいという問題ではないんですけど、時代の流れとして、わかりやすさの方を求める傾向があって、僕自身も、いわゆるクラシックの作品、エラリー・クイーンなんかでは、フィート、インチとかをまだ残したりするんですけども、最近の小説ではセンチに変えたりグラムに変えたりしています。つまり、異化・同化の問題と和臭の問題に関してひとつ言えるのは、認知度とか、わかりやすさというのが、これを判断する基準になるということです。これが、和臭か否かを決める1番目の基準。

またいくつか例を挙げてみます。これ、ちょっと皆さんに聞いてみたいんですよ。翻訳小説において、例えば「仁王立ち」ということばと「修羅場」ということばがあったとします。「和臭」については大体皆さんおわかりになったと思うんですけど、その違和感というか、気持ち悪さというか、「仁王立ち」ということばが翻訳作品で出てきた場合、違和感を感じるな、という人は手を挙げてください。「仁王立ち」だと半分ぐらいいるかな。はい、では「修羅場」で感じる人はいますか？ これはほとんどいませんか。予想どおりです。では、なぜそうなるのか。僕も仁王立ちはバツで、修羅場はマルだと思います。なんでそうかという、多分「仁王立ち」は仁王様が立っている姿が

そのまま目に浮かぶからなんですね。修羅場と言え、それをビジュアルに浮かべるとはまずあまりないですね。すぐにはないです、少なくとも。

似たような例は、「寿司詰め」と「狂言自殺」。寿司詰めって言われると、僕はやっぱりぎゅうぎゅうに詰まっている寿司のネタは何だろうな、みたいに、なんとなく考えてしまったりする。(笑い) 一方、「狂言自殺」という言い方を見たり聞いたりしても、狂言師が舞台上で踊っているところまでは多分頭に浮かべないですね。ですから、普通に考えた時に、いわゆる和臭があって不自然だと感じるのは「仁王立ち」や「寿司詰め」である。つまり、判断基準の2番目はビジュアルかどうかということです。絵が描かれやすいかどうか。これが基準になります。ビジュアルかどうかというと、翻訳小説とかによく出てくる表現で、「口をOの字に開く」というのもある。これは日本の作品でも出てきたりしますけどね。谷崎潤一郎の『細雪』なんかでも、口をOの字に開くという、ちょっと有名な描写があったりするんですけど、翻訳作品だと結構これは出てきます、「O」はね。では、「口をへ字に結ぶ」はどうか。やっぱり、僕は「へ字」はダメだと思う。これまでと同じような理由で、ですね。ひらがなが出てくるのはやっぱり違和感がありますし、そもそも英語の原文に「へ」と書いてあるわけがないですね。(笑い) ですから、これは何か別の表現だったものを翻訳者が「へ」という言い方に変えているわけですね。それをやっていいのかどうか。

難しいのは、「口を真一文字に結ぶ」。これはどっちだろう。僕はマルだと思うんですね。実際使います。なんでかということ、多分「一」というのは漢字でもいわゆる算用数字でも同じように一直線ですから、同じ絵をだいたい思い描くことができる。縦と横の違いがありますけどね。

もうひとつ、「大の字に横たわる」はどうか。これは難しいところですね。自分の訳書を調べてみたら、大の字に横たわる典型的な場面というのがひとつあって、『ダ・ヴィンチ・コード』の冒頭の、ソニエール館長が素っ裸でひっくり返っている場面。これが「大の字に横たわっている」場面です。レオナルド・ダ・ヴィンチのウィトルウィウスの人体図を模しているわけですね。あれも大の字です。ここを僕がどう訳しているかという、その場では「大の字」を使っていないんだけど、別の場所、ソフィーという孫娘——この、館長の孫娘がこの作品で大事な人物なんです——そのソフィーの視点での描写として、「床に大の字になった祖父の全裸死体が目に浮かんだ」とはっきり自分の訳文にありました。英語を調べてみたら、“She pictured her grandfather’s body, naked and”、そのあと、“spread-eagle on the floor.”ここを「大の字」と訳しています。“spread-eagle”というのは、例えばアメリカの国章、国の紋章なんかや、そう、コインに描いてありますね。あの翼を広げたワシ。あれが“spread-eagle”です。比喩的に、いわゆる「大の字」に当たるものによく使う表現です。「大の字」は、僕はあまり不自然に感じないんですけど、なんでかという、ここはちょっと複雑な問題で、ひとつはもちろん「大」という漢字がそのままこの格好なんですけど、もうひとつはですね、「大」という漢字の表意文字としての意味、大きいという意味がここにぴったり合うと思うんですよ。「大きく」手足を広げるという、そういう含意も感じるから、不自然さが緩和されるというかね、そんな気がするんです。

ですから、付随する意味というか、記号として、さらに複雑なもうひとつの意味を持っているかどうかということが、ここに関係してくる可能性があると思います。和臭が感じられるかどうかの第3の判断基準。

つぎの例です。『テッド』という映画が10年ぐらい前に公開されましたね。結構話題になったんで、覚えている方もいらっしゃるかもしれないですけど、ぬいぐるみのクマ、なんか生意気で意地悪な、キャラクターとしてはクレヨンしんちゃんなんかに似ているような、エッチなことをいっぱい言ったりする変なクマが出てくる作品ね。これは日本で公開された時に、あまりにも日本語話者にはわかりにくいジョークが多かったりするんで、アメリカ在住の映画評論家の町山智浩さんが、日本語版の字幕と吹き替えの監修をしました。この時、一番話題になったのはここです。“Sorry, somebody had to go Joan Crawford on that kid.”問題は、このJoan Crawfordです。Joan Crawfordというのは、有名な女優ですからご存知の方は多いと思うんですけど、ここでの“Joan Crawford”とはどういう意味なのかということなんです。Joan Crawfordは有名な女優だったんですけど、亡くなった後で、養子を虐待していたということが発覚し、それが結構話題になったんですね。それを描いた映画というのが——ちょっとタイトルを忘れましたけど——アメリカで公開されました。それが結構ヒットしたりしたので、Joan Crawfordというと「幼児を虐待する人」みたいなイメージがついてまわるんですよ。で、『テッド』ではちょっと冗談めかして言っているんですけど、誰かがその子に「Joan Crawfordをやってやらなきゃいけない」。かなり極端な言い方をしている。でも、Joan Crawfordのままだと、日本人にはほとんどそれが伝わらない。じゃあ町山さんはどうしたかということ、ここで「だれかが星一徹にならなきゃ」とお訳しになった。(笑い)いまお笑いになった人が多いけど、若い人は「星一徹」が誰だかわからないかもしれない。まあ、我々の年代ぐらいだともう「星一徹」って、ちゃぶ台返しと、息子の星飛雄馬へのピンタしか浮かばないんです。だから、そういう人にとっては、ここでは確かに星一徹はぴったりだったんですけど

ど、「わけわかんない」という人と、あとはやっぱり、「だってアメリカに星一徹いないじゃん」という人と、それなりにいました。でもね、面白いか面白くないかは別として、この『テッド』という作品ならこの程度はやってもいいと思う。だから、簡単に言うと、コメディなら OK というかね、あるいはちょっと日常から逸脱したようなシュールな小説とか、そういう場だったらこういうことをやってもいいんじゃないか、と思います。これが4番目の基準。

あとは、逆に古風な作品だったら、格調高い日本語表現、たとえば仏教的な要素がある「仏頂面」とか「因果応報」とか「一期一会」とか、こういったことばって、全部仏教から来ていることばだから本来使えないんですけども、ある程度クラシックな作品だったら、意味の近い概念であれば使ってもおかしくないと思います。

あとは、児童書なら OK、とまでまとめてしまうとちょっと言い過ぎですけど、児童書の場合、やはりわかりやすくすることが重要。1番の「認知度、わかりやすさ」の仲間かもしれないですけどね。児童書は、比較的許容範囲が広いのではないかというふうに思います。

最後にもう一回、「異化」と「同化」、このことばをご存知なかった方は覚えていかれるといいと思うんですが、翻訳への取り組み方を考えていく上での二つのキーワードになります。結局、同化の側でちょっと逸脱しちゃった、つまり「同化しすぎ」なのが「和臭」ですよ。逆に、「和臭」の反対で「洋臭」ということばがあってもおかしくない。それはどっちかということ、異化の側のちょっと逸脱した部分ですね。なんかカタカナばかりで読みにくいとか、意味もわかりにくい、というのは、こっちになるんだと思います。「異化しすぎ」ということです。

というわけで、あまり気の利いた結論にはなりませんでしたが、我々がやっている翻訳というのは、この洋臭と和臭の間で行った

り来たりしながら、一番いいポイントがどの辺であるかというのをいつも考えてやっている仕事であるということで、今日の話はここまでとさせていただきます。ありがとうございました。

(拍手)

司会 越前先生、大変興味深いお話をありがとうございました。文芸作品は一語一語の積み上げでひとつの世界やストーリーが成立していますけれども、さらりと読み飛ばしてしまっているところがあるんじゃないかというふうに、ちょっと自戒の念を込めて伺いました。「和臭」と「洋臭」のバランスの絶妙なところで成立するものを目指して、先生方が翻訳をなさっているということ、そして、判断する際にどういった点を気にしていच्छるかという、翻訳家ならではの視点でお話しいただき、誠にありがとうございました。

いま越前先生のお話を伺っていて、3名の先生方の共通項がひとつ見えてきたんですけれども、最初に金原先生が縦書きと横書きの変遷について、あと日本で使用されているローマ字の揺らぎについてお話しくださいました。また三辺先生は、訳本の出版にあたって、受け入れる側の社会の状況が関係する、というお話をしてくださいました。越前先生は、異化と同化のバランスを図る際に、ひとつの判断基準となるのが、認知度とわかりやすさだとお話しくださいました。こういった先生方のお話から、翻訳の場では異文化——先ほども金原先生がおっしゃっていらっしゃいましたけれども——異文化が我々の自文化と衝突したとき、往々にして翻訳家の先生方はその営みの中で弁証法的に解決策に至るのではないか。そして、止揚された解決策というのは、時間はかかるものの、やがて我々の自文化の一部として定着していくのではないか。そのようにして翻訳を通じて私たちの文化が揺らいだり、変容したりしているのではないかというふうに考えさせて

いただきました。

先生方それぞれのご視点で、大変豊かな経験に基づいて、見識豊かなお話を聞かせていただき、誠にありがとうございました。

お時間が5分ほどありますので、よろしければ皆様からご質問等ありましたら、質疑応答の時間を設けたいと思いますが、いかがでしょうか。はい、それではお願いいたします。

質問者1 ありがとうございました。金原先生にお聞きしたいんですけど、岸田吟香がいたからこそ、ヘボン式ローマ字が広まったと思っていいんでしょうかね。上海まで行って、相当苦勞をしたらしいんですけど。

金原氏 それは多分ヘボン先生の業績で、岸田吟香はそのお手伝いをした、そういう役割ですかね。はい。ついでに言っておくと、岸田吟香についてよく言われるのが、日本で初めて卵かけご飯を食べた人です。(笑い)

質問者2 大変興味深いお話をありがとうございました。越前先生にちょっと伺いたいことがございます。異化と同化ということでお話を伺ったときに、2つほど単語が頭に浮かびました。“commitment”という単語と“involvement”という単語です。このふたつは、先生だったら異化と同化のどの辺りに位置すると思いますか。

越前氏 訳語がですか？ それをカタカナのまま使った場合ということですか？

質問者2 訳語にする場合、どのようにされますか。

越前氏 難しいですね。能動的に関わるとか、そういう説明的な訳語にしかならないんですね。まあ、“involvement”もそうかもしれないけど。commitということばを訳するのが難しいということは、『こ

の英語、訳せない!』という本に書いた覚えがあります。「結果にコミットする」とかね、ライザップのコマーシャル、あれは最近そのままカタカナになっていて、かなり今「コミット」は日本語化していますよね。ですから、そういう意味では「異化」の側で、今そのまま受け入れられているのではないかと思います。“involvement”のほうは、カタカナではまず使わないと思うんですが、ご質問の趣旨をもうちょっと詳しく伺えますか？

質問者 2 よく英文で出てくるときに involve とか involvement は、そのまま使っちゃうと文脈にぴったりはまらない。そこで、かなり意識をしないと意味が合わない。いつも苦勞する。一体、この単語が「異化」に入るのか、「同化」にした方がいいのか、その中間あたりが一番いいのか、それとも相当意識をしなきゃいけないのか。とても日本語にしにくい単語で、いつもその三つの中でどれがいいのかって悩むんですけど。

越前氏 なるほど。一対一対応で単語として訳すということから、まず解放されるというか、そうしなきゃダメなんじゃないかなと思うんですよ。「能動的に参加する」とか——積極的でもいいですけども——名詞にこだわらずにアレンジして、僕は結局最終的にはどっちかという日本語寄りというか、同化寄りで処理すると思います。単語レベル、一対一対応だけでは多分無理だと思うんですけど、基本的に“commitment”ということばは、さっき三辺さんの話にあった「フェミニズム」のような、深く物を考えるためのキーワードとして、そのまま残していかなきゃいけないものではなくて、単に訳しにくいレベルのものですから、そういうものは、基本的には品詞を変えるなど、処理を工夫して「同化」の側というのかな、日本語の自然な言い方に変えていくのが原則だと思います。

質問者 2 ありがとうございます。

質問者 3 三辺先生に質問です。今まであまり出版のタイムラグがあるということは考えたことがなくて、本屋さんに並んでいたら「買って読んでみよう」と思う、という感じでした。三辺先生は、これからこういう本が必要だ、というふうにおっしゃっていましたが、誰が「翻訳しよう」と言うのか。出版社の人が言うのか、読者が言うのか、翻訳者の方が提案するののかという点が気になりました。教えていただけますか？

三辺氏 それは出版社と訳者と半々ぐらいですかね。訳者は、「持ち込み」といって、こういうものを出したいとか、特定のテーマのものだけじゃなくて、面白いと思ったものとかを出版社に持っていく。逆に、出版社がそういう本を選んで、訳者に依頼することもあります。でも、やっぱりその時に、特定のテーマのものを出したいと訳者が思っても、出版社が「まだ早い」とか「もう遅い」と思えば出にくいかもしれませんし、そういう時代と社会のバランスの中で決まることもあると思います。もちろんそれだけではないんですけども。答えになっていますでしょうか。

質問者 3 はい、わかりました。ありがとうございました。

司会 はい、ありがとうございました。名残惜しいのですが、お時間が参りましたので、これをもってシンポジウムを終わらせていただきます。皆様、お忙しい中、本日は土曜日の午前中にお越しいただき誠にありがとうございました。